

## 乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響

研究第5部 網野 武博  
望月 武子  
研究第3部 加藤 忠明  
戸越愛育園 池田 範子  
嘱託研究員 丸尾 あき子  
金子 保 (淑徳大学)  
野田 幸江 (立正大学短期大学部)  
塚原 富 (聖マリア保育園)  
関口 宏 (昭和第二幼稚園)  
朽尾 勲 (厚生省児童家庭局)

### 要約:

過去6年間にわたり4保育園の縦断的調査、検査を実施した結果のうち、とくに0歳から同一の保育園で保育を受けた園児について、精神発達、性格傾向について分析、検討を加えた。総体的にみると、精神発達、性格傾向ともに0歳から同一の保育園で保育を受けることは、在園期間が長くなるに従い発達上マイナスの効果加わる傾向はみられず、とくに精神発達に関してはむしろプラスに評価される側面がみられた。しかしその結果は、統計的検定からは、積極的に指摘し得るレベルのものではなく、5、6歳の時点での相違は顕著ではなかった。性格傾向をみると、0歳からの入園児のパーセンタイル値の方が幼児期からの入園児のそれよりも低い項目は非常に少なく、集団保育環境が早期から提供されることが必ずしもマイナスの効果をもたらすとは言えない結果であった。しかし性格傾向においても6歳の時点での相違は顕著ではなかった。主成分分析の結果、在園期間とこれらの値との相関は非常に低かった。精神発達、性格傾向ともに、高年齢程相違が少ないことは、保育環境がもたらす環境適応性、対人適応性が幼児自身の発達による適応性の拡大によって、その相違を希薄化させると考えられた。

見出し語: 乳児保育、0歳からの保育、保育効果、保育所

### Study on the Effects of Day Nursing from the First Year of Age on Child Development

Takehiro AMINO, Takeko MOCHIZUKI, Tadaaki KATO, Noriko IKEDA, Akiko MARUO,  
Tamotsu KANEKO, Yukie NODA, Tomi TSUKAHARA, Hiroshi SEKIGUCHI, Isao TOCHIO

Psychological development, characteristic and behavioristic tendency of preschool children who had been day cared so long time since the first year of their lives were analysed. On the whole, scores of development and tendency showed little negative effect on children's development in accordance with the length of day cared duration and rather higher particularly in children who were cared since 0 year of age.

On the other hand, the difference of development between long time being cared children and short time being cared ones at 5 & 6 years of ages was not remarkable. As a result of principal component analysis, the correlation between these scores and length of day cared duration was extremely low. These results suggested that the day care effect of promoting their adjustment will be weakened at older preschool age, because their innate development of adjustment ability must be evident.

Key Words: Infant Day Care, Effect of Day Nursing, Day Nursery

I 目的

0歳からの保育、夜間保育、長時間の保育等がその後の発達に及ぼす影響については、これまで種々の関心と議論を呼びながら、必ずしも長期的、縦断的な検討が十分に加えられてきたとは言い難い。多様な保育ニーズが高まる中で、それらの是非を問うだけではなく、そのプラス、マイナスの効果を総合的にとらえ、より望ましい保育効果を検討する必要がある。このため、横断的、縦断的（回顧的、展望的）にこの課題に関する研究をすすめ、今後の保育及び家庭養育のあり方について検討を加える。

II 方法

本年度は、過去6年間にわたり本プロジェクト研究をすすめた4保育園の縦断的調査、検査の結果のうち、とくに0歳から同一の保育園で保育を受けた園児について、精神発達、性格傾向について分析、検討を加えた。

1 対象

6年間の対象児 2,616人（0歳57人、1歳 299人、2歳 372人、3歳 479人、4歳 535人、5歳 547人、6歳 327人）のうち、性格傾向の検査の可能であった3歳以上の園児を対象とした。最年長の6歳児については、

表1 在園期間（月数）別、性別6歳児数

	～11月	～23月	～47月	～59月	60月～	合計
男児	13	44	39	40	32	192人
女児	9	38	22	21	27	133
合計	22	82	61	61	59	325

表2 年齢別、性別全園児数及び0歳からの入園児数とその割合

性別	3歳児			4歳児			5歳児			6歳児			全体
	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計	男児	女児	合計	
全園児 (a)	257	222	479	297	238	535	301	246	547	195	132	327	1,888
0歳からの入園児 (b)	94	81	175	82	67	149	70	59	129	32	27	59	512
(a) / (b) %	36.6	36.5	36.5	27.6	28.2	27.9	23.3	24.0	23.6	16.4	20.5	18.0	27.1

在園期間別の比較を行なうため、在園期間の不詳な2名を除く325名である。在園期間（月数）別、性別の6歳児数は、表1のとおりである。このうち、各年度において在園期間60月～の園児が0歳からの入園児に該当する。また、年齢別、性別の全園児数及び0歳からの入園児数とその割合を示したものが、表2である。0歳からの入園児数は、近年その数が次第に増加している傾向を反映し、低年齢層全園児数に占める割合は増加している。また、0歳から入園しても途中転園する園児が毎年みられるために、年長児の割合が低くなる。

2 検査、調査内容

本プロジェクト研究の6年間の縦断的調査、検査のうち、以下の2種類について結果を分析した。

- (1) 津守・稲毛式乳幼児精神発達診断法の各DQ値及び全体DQ値の計6項目
- (2) 高木・坂本式幼児児童性格診断検査の13の特性項目

III 結果

1 精神発達

(1) 6歳児の傾向

最年長の6歳児について、在園期間別、性別に精神発達DQ値を比較したものが、図表1である。精神発達DQ値は、0歳からの入園（60月～）児から5歳からの入園（～11月）児即ち年長の1年間のみ保育園に通う園児までを比較すると、在園期間が長くなるにつれてDQ値は概ね高くなっている傾向がみられる。女児の生活習慣を除き、すべての60月～児のDQ値が～11月児のそれを上廻っており、女児の探索・操作は有意に高かった。すべての在園期間を通じて、60月～児のDQ値が最も高かった項目は、男児ではすべての項目、女児では生活習慣を除く5項目であった。

網野他：乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響

生活習慣は、他の項目と異なり在園期間による相違は殆どみられなかった。

なお6歳児のDQ値は、発達診断法の性格上月齢84か月（7歳時点）以上の値を測定できないため、とくに5歳後半から6歳児については検査上のプラトーにより、DQ値が低下する傾向がみられた。従って、他の年齢とDQ値を経年齢的に比較することには難点があった。また最高年齢の6歳児については、0歳からの保育効果を最も長期的にみるができるという特徴も考慮して、独立して検討を加えたが、3歳児から5歳児までについては、経年齢的に検討を加えた。

(2) 3歳児から5歳児までの傾向

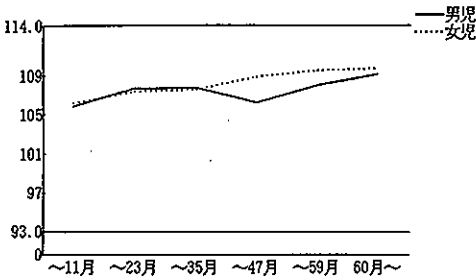
3歳から5歳までの園児について、年齢別、性別に0歳からの入園児と幼時からの入園児の精神発達DQ値を

比較したものが、図表2である。6歳児と同じく、0歳からの入園児のDQ値が概ね高い傾向がみられるが、しかし性別でその傾向はやや異なる。男児で幼時からの入園児の方が高いのは、5歳児の生活習慣のみであるが、女児では、3歳児の運動機能、社会性・情緒・4歳児の探索・操作、言語・理解、5歳児の生活習慣と、やゝ多くなっている。

しかし、統計的に有意に0歳からの入園児が高い項目は3、4歳児に限られている。3歳児では、男児及び女児ともに探索・操作、生活習慣の2項目が有意に高い。4歳児は、男児では社会性・情緒の1項目が、女児では生活習慣の1項目が有意に高いが、5歳児では、男女ともに有意に高い項目はみられなかった。

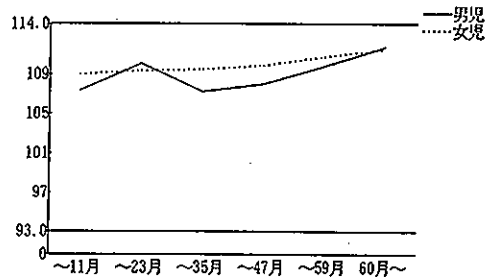
図表1 6歳児の在園期間（月数）別、性別精神発達DQ値の比較

運動機能DQ値



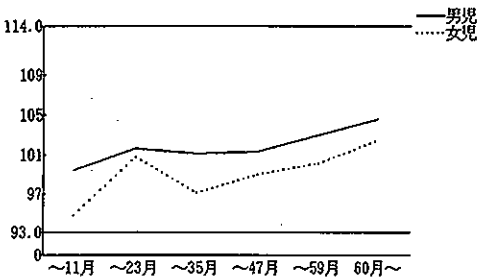
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	105.85	107.67	107.75	106.28	108.03	109.13	108.47
女児	106.22	107.38	107.55	108.82	109.48	109.67	108.38

社会性・情緒DQ値



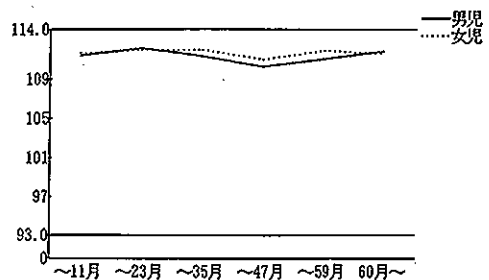
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	107.38	110.04	107.25	108.03	109.75	111.72	109.03
女児	109.00	109.31	109.45	109.82	110.71	111.44	110.07

探索・操作DQ値



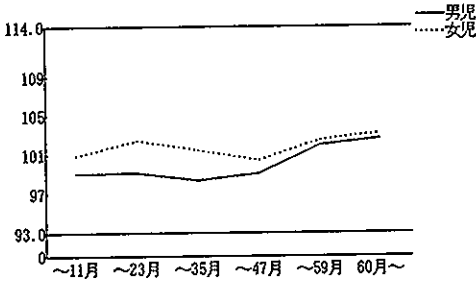
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	99.46	101.67	101.11	101.33	103.00	104.63	102.09
女児	94.78	100.81	97.11	99.00	100.19	102.52	99.29

生活習慣DQ値



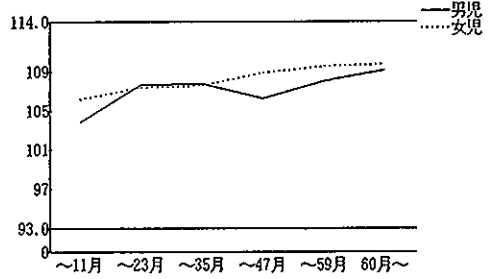
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	111.31	112.08	111.25	110.23	111.00	111.78	111.19
女児	111.56	111.88	111.87	110.95	111.86	111.48	111.62

言語・理解DQ値



	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	99.08	99.13	98.32	99.03	102.00	102.63	100.10
女児	100.89	102.44	101.47	100.41	102.52	103.19	101.89

全体DQ値

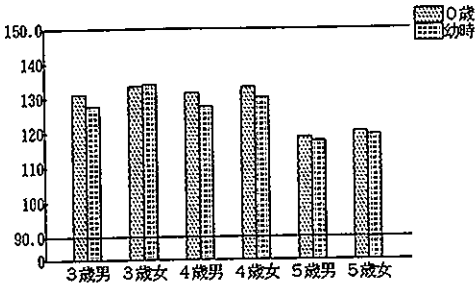


	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	104.23	106.17	105.16	104.92	106.73	107.97	105.97
女児	104.44	106.38	106.05	105.77	106.90	107.63	106.39

(\*\* F検定により  $P < 0.01$  有意)

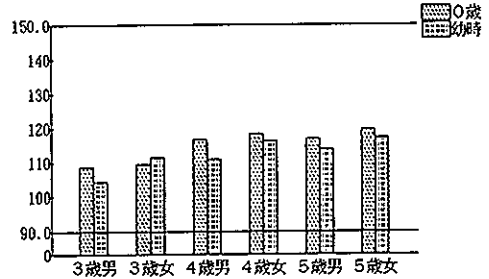
図表2 年齢別、性別0歳からの入園児と幼時からの入園児の精神発達DQ値の比較

運動機能DQ値



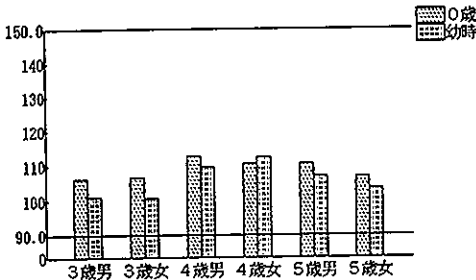
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	131.13	133.34	131.54	133.22	118.87	120.34
幼時入園	127.77	133.96	127.63	130.21	117.68	119.26

社会性・情緒DQ値



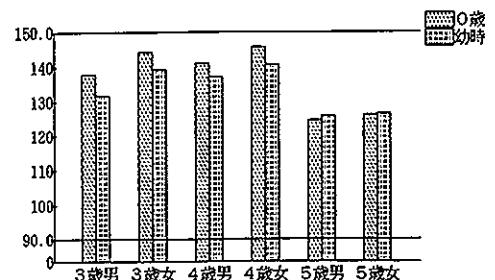
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	108.71	109.60	116.68	118.40	117.00	119.73
幼時入園	104.41	111.65	111.02	116.34	113.94	117.36

探索・操作DQ値



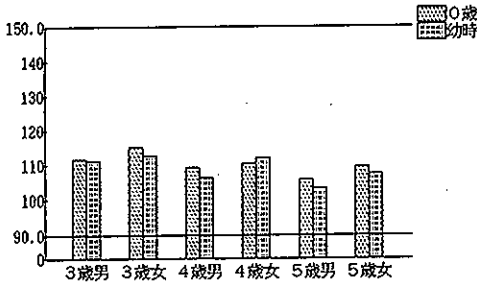
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	106.47	106.79	112.83	110.72	110.69	106.93
幼時入園	101.14	100.81	109.68	112.75	107.20	103.61

生活習慣Q値



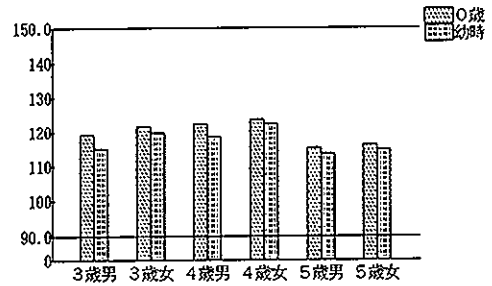
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	138.04	144.37	141.21	145.91	124.71	126.17
幼時入園	131.88	139.35	137.27	140.75	126.07	126.62

言語・理解DQ値



	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	111.68	115.33	109.43	110.43	105.89	109.49
幼時入園	111.44	112.81	106.38	112.11	103.48	107.58

全体DQ値



	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	119.27	121.84	122.45	123.73	115.49	116.47
幼時入園	115.33	119.87	118.82	122.42	113.72	114.89

(\*\* \* T検定により  $p < 0.01$  で有意 \* T検定により  $p < 0.05$  で有意)

## 2 性格傾向

最年長の6歳児について、在園期間別、性別に高木・坂本式幼児・児童性格診断検査の性格傾向パーセンタイル値を比較したものが、図表3であり、3歳から5歳までの園児について年齢別、性別に0歳からの入園児と幼時からの入園児の性格傾向パーセンタイル値を比較したものが、図表4である。

13の項目は、次のような対の特性を持ち、左の傾向が強い程パーセンタイル値は1に近づき、右の傾向が強い程パーセンタイル値は99に近づく。

- (1) 顕示性 : 顕示性が強い ⇔ ⇔ 顕示性なし
- (2) 神経質 : 神経質 ⇔ ⇔ 神経質でない
- (3) 不安傾向 : 情緒不安定 ⇔ ⇔ 情緒安定
- (4) 自制力 : 自制力なし ⇔ ⇔ 自制力あり
- (5) 自主性 : 依存的 ⇔ ⇔ 自立的
- (6) 退行性 : 退行的 ⇔ ⇔ 生産的
- (7) 攻撃性 : 攻撃・衝動的 ⇔ ⇔ 温和・理性的
- (8) 社会性 : 社会性なし ⇔ ⇔ 社会性あり
- (9) 家庭適応 : 家庭へ不適応 ⇔ ⇔ 家庭へ適応
- (10) 保育所適応 : 保育所へ不適応 ⇔ ⇔ 保育所へ適応
- (11) 体質傾向 : 体質的不安定 ⇔ ⇔ 体質的安定
- (12) 個人的安定度 : 個人的不安定 ⇔ ⇔ 個人的安定  
(上記(1)から(7)までの粗点に基づいて換算)
- (13) 社会的安定度 : 社会的不安定 ⇔ ⇔ 社会的安定  
(上記(8)から(10)までの粗点に基づいて換算)

### (1) 6歳児の傾向

最年長児の6歳についてみると、13項目のうち、顕示性、神経質、不安傾向、自制力、自主性及び体質的安定、個人的安定の7項目で、0歳からの入園児が5歳からの入園児よりもパーセンタイル値が高い。しかし在

園期間が長くなるとともにパーセンタイル値が高くなる項目はみられなかった。逆に、在園期間が長くなるとともにパーセンタイル値が低くなる項目もなく、0歳からの入園児よりも5歳からの入園児の方が高い項目は、退行性のみであった。攻撃性、社会性、家庭適応、保育所適応及び社会的安定の5項目は、在園期間というファクターとのかかわりは薄かった。

13項目のうち、保育所適応を除く12項目はF検定で有意な差 ( $p < 0.01$ ) がみられた。即ち、在園期間による変動は大きく、またそれは一定の傾向を示す変動ではなかった。6歳児の段階では、保育所適応のみ在園期間による有意な差はなく、変動の幅は非常に小さかった。

なお、パーセンタイル値は概ね女児の方が男児よりも高い。すべての在園期間を通じて女児の方が高い値を示した項目はきわめて少ないが、自制力及び保育所適応の2項目にみられた。

### (2) 3歳から5歳までの傾向

3歳から5歳までの段階でも、各年齢ともに0歳からの入園児の方が幼時からの入園児よりもパーセンタイル値の高い項目が多かったが、13項目のうち両者に有意な差のみみられたものが含まれている項目は、図表4に示す自主性、家庭適応、保育所適応及び体質的安定、個人的安定、社会的安定の6項目であった。

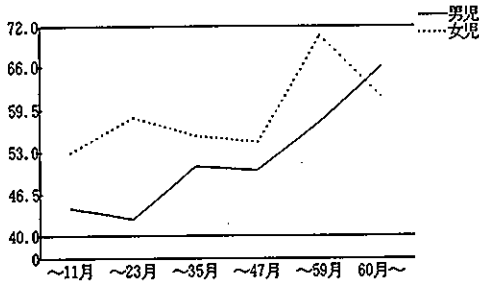
有意な差がみられるものは、殆ど女児であり(3歳児の体質的安定、個人的安定及び社会的安定、4歳児の自主性及び保育所適応、5歳児の家庭適応)、男児は、5歳児の自主性のみであった。

## 3 主成分分析の結果

3歳から6歳までの園児の精神発達DQ値及び性格傾

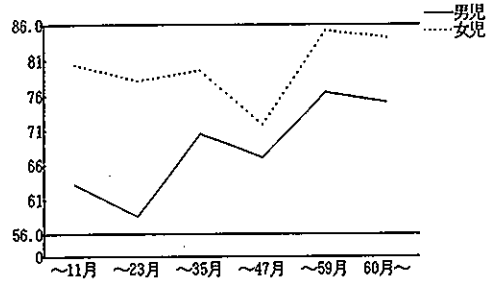
図表3 6歳児の在園期間(月数)別、性別性格傾向パーセンタイル値の比較

顕示性



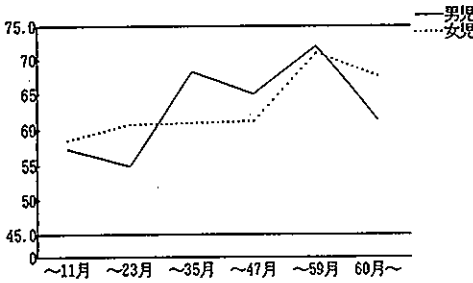
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	44.33	42.61	50.73	50.08	57.58	65.97	51.42
女児	52.86	58.31	55.50	54.45	70.67	61.44	59.82

自制力



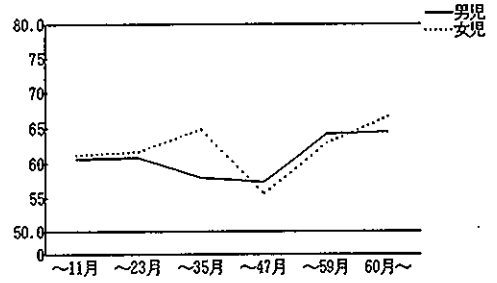
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	63.27	58.61	70.55	67.05	76.50	75.09	68.65
女児	80.43	78.19	79.68	71.86	85.20	84.20	79.94

神経質



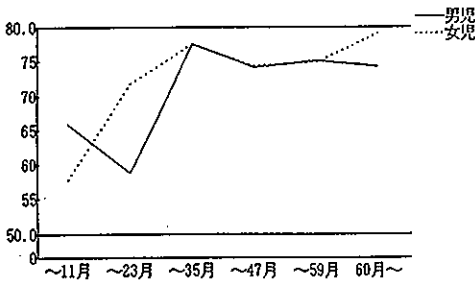
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	57.33	54.91	68.25	65.00	72.08	61.44	64.82
女児	58.57	60.81	61.00	61.27	71.10	67.68	63.83

自主性



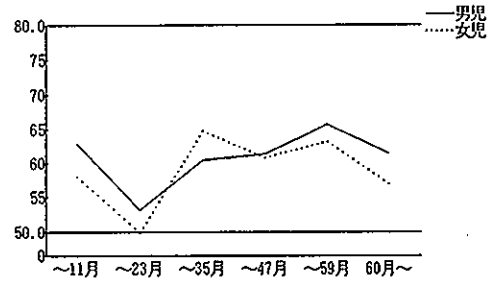
	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	60.67	60.87	58.05	57.35	64.23	64.47	62.84
女児	61.25	61.67	64.89	55.68	62.92	66.60	63.72

不安傾向



	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	66.00	58.83	77.64	74.22	75.18	74.34	72.73
女児	57.86	71.81	77.53	74.45	74.85	79.12	76.38

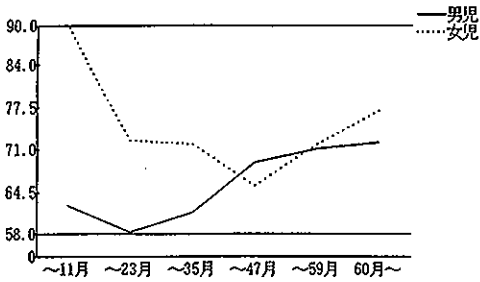
退行性



	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	63.00	53.22	60.48	61.46	65.83	61.50	61.28
女児	58.13	49.33	64.87	60.91	63.29	56.96	61.13

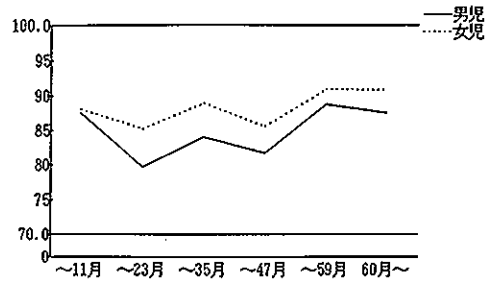
網野他：乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響

攻撃性



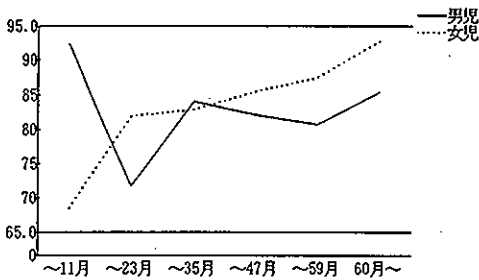
	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	62.47	58.32	61.45	69.00	71.08	72.06	66.10
女児	89.86	72.33	71.84	65.45	71.76	77.04	74.07

保育所適応



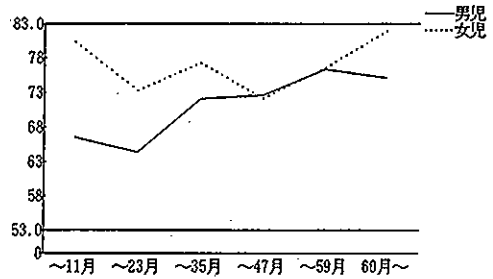
	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	87.53	79.67	84.02	81.73	88.85	87.52	84.98
女児	88.14	85.19	88.89	85.59	90.95	90.88	88.31

社会性



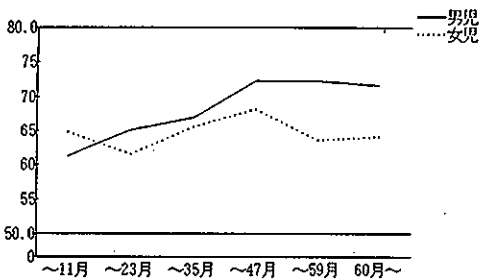
	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	92.47	71.77	84.14	82.19	80.83	85.38	82.07
女児	68.57	82.00	82.92	85.55	87.50	92.76	88.75

体質的安定



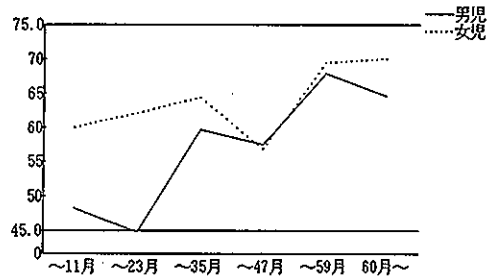
	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	65.53	64.43	72.12	72.70	76.42	75.22	73.25
女児	80.38	73.31	77.32	72.18	76.52	81.92	76.90

家庭適応



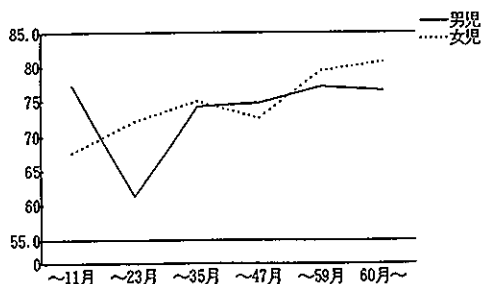
	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	61.27	65.17	67.00	72.35	72.33	71.68	69.60
女児	64.86	61.50	65.58	68.27	63.65	64.12	64.91

個人的安定



	～11月	～23月	～35月	～47月	～59月	60月～	全 体
男児	48.27	43.04	59.80	57.59	67.98	64.69	59.05
女児	60.00	62.20	64.45	56.91	69.53	70.08	64.50

社会的安定

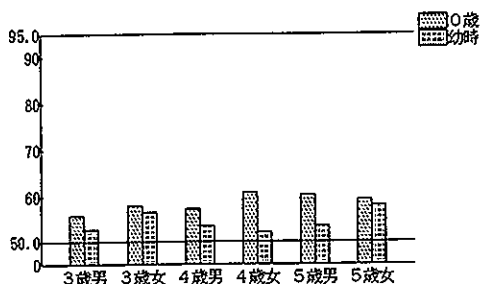


	~11月	~23月	~35月	~47月	~59月	60月~	全体
男児	77.33	61.33	74.29	74.76	77.10	76.55	72.56
女児	67.61	72.20	75.00	72.64	79.37	80.68	75.64

図表4 年齢別0歳からの入園児と幼児からの入園児の性格傾向パーセンタイル値の比較

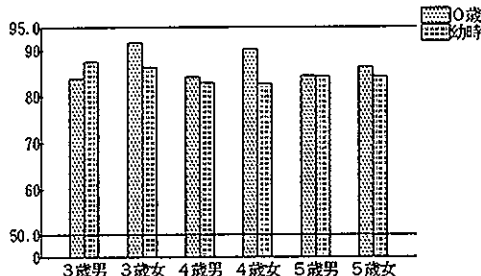
向パーセンタイル値に関し、主成分分析を行なった。年齢別、性別にこれらの値と在園期間との相関係数を算出した結果、また年齢別、性別に在園期間の因子負荷量が0.50を越える固有値を持つ因子の有無及びそれがあつた場合の寄与率と因子負荷量を示したものが、表3である。先にふれた精神発達及び性格傾向における在園期間による特徴をほぼ反映している。在園期間の長さとの相関が0.300を越えるものは非常に少なく、精神発達において低い相関が6歳及び3歳の男児を主にややみられたが、性格傾向に関しては6歳児を主にややみられる程度であつた。3歳男児及び6歳児に関して、因子負荷量が0.50を越えているが、しかし寄与率はきわめて低く、考慮に値する程度のものではなかつた。

自主性



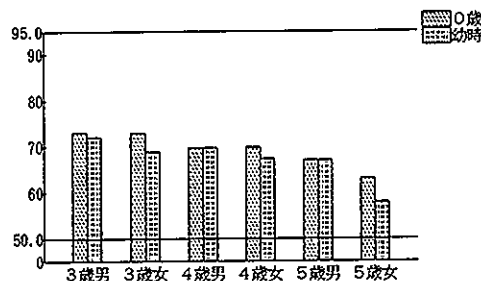
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	55.86	58.11	57.37	60.90	60.36	59.35
幼時入園	52.80	56.71	53.52	52.19*	53.56*	58.18

保育所適応



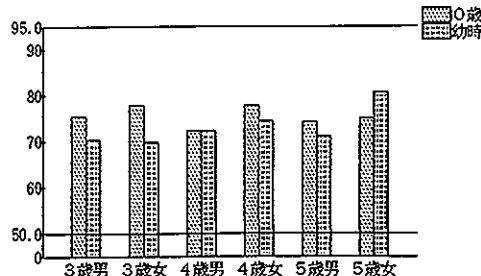
	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	84.01	91.78	84.26	90.37	84.48	86.42
幼時入園	87.59	86.31	82.99	82.90*	84.41	84.34

家庭適応



	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	73.10	73.02	69.80	69.89	67.12	63.08
幼時入園	72.19	69.01	69.86	67.44	67.15	57.95*

体質的安定

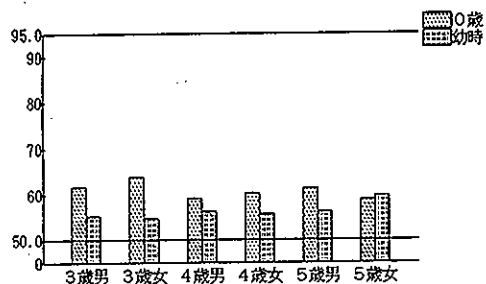


	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	75.47	78.05	72.54	77.97	74.33	75.12
幼時入園	70.47	70.11*	72.61	74.59	71.28	80.80

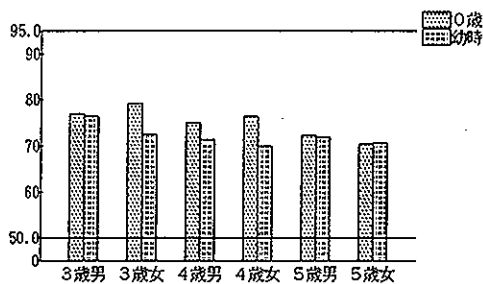


網野他：乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響

個人的安定



社会的安定



	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	61.74	63.89	59.26	60.29	61.43	58.98
幼時入園	55.39	54.82*	56.33	55.75	56.26	59.84

	3歳男	3歳女	4歳男	4歳女	5歳男	5歳女
0歳入園	76.99	79.30	75.00	76.51	72.42	70.49
幼時入園	76.44	72.51**	71.48	70.11	72.04	70.79

表3 年齢別、性別精神発達DQ値及び性格傾向パーセンタイル値の在園期間との相関係数及び主成分分析の結果

	3歳男児	3歳女児	4歳男児	4歳女児	5歳男児	5歳女児	6歳男児	6歳女児
運動機能	0.176	-0.156	0.183	0.062	0.043	0.037	0.118	0.070
探索・操作	0.247	0.204	0.027	-0.008	0.214	0.169	0.304	0.220
社会性・情緒	0.124	-0.087	0.234	0.149	0.213	0.072	0.099	0.141
生活習慣	0.233	0.255	0.185	0.219	-0.077	-0.109	0.160	-0.208
言語・理解	0.152	0.188	0.115	-0.086	0.166	0.079	0.262	-0.078
全体	0.244	0.166	0.197	0.135	0.156	0.071	0.224	0.037
頭示性	0.257	0.025	-0.049	0.064	0.043	0.091	0.344	0.214
神経質	0.101	0.224	-0.006	-0.054	0.314	-0.039	0.181	0.149
不安傾向	0.165	0.196	0.159	0.001	0.078	-0.045	0.110	0.238
自制力	0.112	0.092	-0.099	-0.075	0.052	0.074	0.062	0.052
自主性	0.116	0.171	0.012	0.222	0.219	0.120	0.093	0.179
退行性	0.097	-0.070	-0.154	0.046	0.089	-0.054	0.079	-0.145
攻撃性	0.166	-0.173	0.023	0.097	0.146	0.021	0.126	0.028
社会性	-0.022	0.131	0.080	0.051	0.190	-0.099	-0.196	0.350
家庭適応	0.246	0.044	-0.041	0.110	-0.051	0.110	0.135	-0.043
保育所適応	-0.088	0.129	-0.072	0.286	0.076	0.001	0.112	0.139
体質的安定	0.149	0.275	-0.067	0.038	0.137	-0.214	0.282	0.112
個人的安定	0.222	0.018	0.021	0.173	0.173	-0.057	0.356	0.142
社会的安定	0.194	0.208	0.007	0.129	0.100	-0.030	0.037	0.192
在園期間の因子負荷	有り	無し	無し	無し	無し	無し	有り	有り
量.5以上の有無、寄与率及び因子負荷量	6.3 %						10.5 %	7.5 %
	0.588						0.563	0.550

## IV 考察

0歳の時期から保育を継続して受ける乳児は、次第にその数を増しつつある。筆者らは、従来の乳児保育是非論の延長戦上で、明瞭な根拠を持たずに一般的のみならず専門的にも乳児保育に対する否定的評価がよくみられることに対し、些かでも事実を確認する必要があること、そして現実には0歳から家庭外で保育を受ける乳児が増加し、是非論を越えて現実には保育を受ける多くの乳幼児にとってより望ましい保育環境を常に配慮すべき差し迫った状況にあること、の二点を重視し一連の研究をすすめてきた。筆者らのこれまでの結果からは、0歳からの保育が必ずしもマイナスの影響を及ぼすものではないが、しかし保育効果を検討する際には、多様なファクターを考慮する必要があることを指摘してきた。

今回の6年間にわたる精神発達、性格傾向に関する縦断的追跡の結果から、あらためて検討を加えると、次のようなことが考察された。

まず総体的にみると、精神発達、性格傾向ともに0歳から同一の保育園で保育を受けることは、在園期間が長くなるに従い発達上マイナスの評価が加わる傾向はみられなかった。とくに精神発達に関しては、むしろプラスに評価される側面がみられたということは、3歳児までについて検討を加えた過去の研究結果が、おおむね年長という最も保育効果を検討しやすい時期においても検証されたように思われる。しかし、その結果は、統計的にも積極的に指摘し得るレベルのものではない。むしろ、3、4歳頃までは0歳からの保育効果が有意にみられる部分があるが、5、6歳にかけてはその相違は顕著ではなく、生活習慣のように、保育経験や在園期間の長さが殆ど影響を及ぼしていないと考えられる面もあり、集団保育の効果と幼児期における発達のプロセスとの相互関連性は、保育のすすめ方を考える上で興味ある結果であった。

性格傾向については、幼児期における性向を恒常的なものとして、すなわち「性格」という表語で把握することには難点がある。性格診断検査という名称に照らし、性格傾向と表現しているが、その内容は保育者が日常の関わりを通じて概ね客観的に把握している情緒・感情的、行動的傾向というべきものである。本研究の結果を考察すると、0歳からの入園児のパーセンタイル値の方が幼時からの入園児のそれよりも低い項目は非常に少なく、逆に高い項目の方が多かったことは、集団保育における保育者や他の園児との日常の相互関係を主とする人

的環境が早くから提供されることが、安定性、積極性、適応性の面で必ずしもマイナスの効果をもたらすとは言えないことを示唆している。しかし、最年長の6歳児では、社会性や保育所適応等は在園期間による差がみられないことは、先にふれた精神発達における生活習慣と同じく、保育効果と発達のプロセスとの相互関連性について考えさせるものがある。

以上の分析結果を、主成分分析によって検証してみたが、在園期間による特徴は、概ねこれらの分析結果を反映するものではあったが、しかし在園期間との相関は非常に低いものであり、在園期間がこれら精神発達や性格傾向に及ぼす影響には、その他のファクターが多様に絡んでいることを改めて示唆するものであった。

本研究では、0歳から保育を受けている乳幼児の家庭的背景を分析上の背景として取り上げることができなかった。また、縦断研究をすすめた4保育園の保育方針、保育内容に関しても分析上の背景として取り上げることができなかった。在園期間による分析はこれらをもふまえることによって、より明確化できる部分が多いと考えられた。その中でもとくに重要な視点を上げ、今後の本研究へと結び付けたい。

それは、前述したように保育環境と幼児自身の発達のプロセスにおける環境適応性、対人適応性の拡大との関連である。集団保育の場が早期から提供されることは、保育環境が乳幼児の生活のルーティーンに深くかかわり、保育環境の量と質が発達促進的刺激として作用することは否定できない。それが、年齢が長ずるに従って、一方では環境適応性の拡大が保育経験の長い幼児と短い幼児との環境の量と質としての相違を希薄化すると考えられる。しかし、保育環境のうちでも対人的環境は、物理的、素材的、自然的環境とは異なる。対人的環境が他の環境と異なる最も重要な点は、「相互性」、「応答性」を持った環境という点にある。人間として発達することの重要な起点と考えられる初期環境、早期環境が、その後の発達に及ぼす影響を示唆する幾多の研究や論点の基盤は、この時期における対人的な「相互性」、「応答性」の重視ということにある。それは単に母子相互作用という限られた視点ではなく、母性的養育、あるいはマターニシティの質にかかわり、対人適応性の発達と直接かかわってくる。

本研究において、保育所における保育方針や保育環境における保育者と乳幼児との「相互性」、「応答性」の意義をふまえ、また家庭における両親とりわけ母親と乳幼児との「相互性」、「応答性」の意義をふまえて、今回不十分であった検討部分をすすめていきたい。